



老艶の世界

——富安風生の晩年

岡本 眸

辞典では晩年と老年は同義だが、受けるニュアンスが少しちがうようだ。老年には肉体的意味が先行するが晩年には精神とか人格といった匂いが裏打ちされる。晩年必ずしも豊かとは限らない。非運も、悲慘もあるがどちらにせよその人の生涯をかけて磨き出した色彩であることに間違いはない。

長年築いてきた精神的財産を基盤に、迫り来る老衰にも死神にも平然と身を処す、少なくとも他目にはわずかな乱れも見せない。これも立派な晩年だと思う。それとは別に、その折々の自己の真実を見つめ、老いを悲しみ死を怖れる平凡極まりない人間の弱さを正直に、飾ることなくさらけ出して、やがて、一切放下の境に至って自らなる自然への帰一にむかう、といった晩年もある。わが師、富安風生は後者の人であった。

晩年の風生俳句の神髄は生死という人生最大、永遠の大問題にひしと真向かって、生命の赤裸々な真実を詠いあげたところにある。

傾倒されていた武者小路實篤の「生まれけり、死ぬるまでは生きるなり」の自然随順の境を一つの理想として考えておられたろうが、己れは己れ、自らの肉体と魂とをもってこの大テーマに真向かわれたのである。そこに独自の色彩が生まれた。「生命の艶」(山本健吉)の彩であり、老艶の世界である。

自然随順ということ、小さな、しかし、楽しい思ひ出がある。あるとき、先生と話をしていた人生観のことにふれ、自然随順のことが出た。そのとき「自然随順……判るかい？ 自然はこの大きな自然、随順の随はしたがう意味でコザトヘンに……」と噛んで含めるように文字の書き方を教えられた。一生懸命に指で卓上に文字を書かれる先生を見て「大丈夫です。知っています」などとはとうてい言えなかった。結果として先生に余計な面倒をかけてしまったのだが、先生の目には私がどんなにか幼く、未熟に見えていたのだろう。見えていたのではない、しんじつ、その通りで自然随順の文字

は知っていてもその本当の意味は現在もって判らないのだから……。

そんな私が「風生晩年の句境」などと大それた一文を書くうとしている、その姿に先生はさぞ、おかしくも、不安にも思われているだろう。が、いつもおっしやっていたように「それも本当だよ」と許して下さるかもしれない。文中、敬称、敬語を略することをお許し下さい。

富安風生、本名謙次。明治十八年四月十六日、愛知県八名郡金沢村に生まれる。東大法科を出て通信省入り。昭和十二年、次官をもって退官。戦後請われて二年ほど電波管理委員長を勤めるが、殆ど終生を俳句一筋に通じた。

俳句入門は大正八年、三十五歳で高濱虚子に師事、九十五歳で没するまで六十年の俳句人生であった。

その間、数多くの著作があるが句集は、収録作品の重複を避けると、昭和八年出版の『草の花』から没後刊行の『走馬燈』を含め十七句集となる。

『自選自解 富安風生句集』(昭44)の「稿を了えて」に次のように書かれている。

『草の花』時代の基礎勉強の後、『松籟』で少しあばれてみ、目標のない『冬霞』の彷徨を経て『村住』に至って純粹客観写生から漸く内向的に傾斜し、心境的なものに心をひかれるようになる(後略)。控えめな語り口の中に自らの句境の推移が簡潔、正確に言いとめられている。

以前よく弟子たちの間で「いわゆる、風生俳句の出發はい

つからか」という話が交わされた。例外なく『古稀春風』をあげ、あるいは『晩涼』『古稀春風』のころ、と指摘する。一座の末席に侍りながら私もそれを首肯していた。年代的には昭和二十六、七年ごろ、丁度「ホトトギス」雑誌への投句をやめ、虚子選を離れて以降の時期に当る。

老いはいや死ぬこともいや年忘れ

『古稀春風』所収。昭和二十九年七十歳の作である。風生俳句に「老」が登場したのは昭和十二年五十三歳の作「用ひざる団扇を立つる老の膝」だが、古稀のころも、現実に見る姿には老人臭などひとかけらもない、綺麗な方だったと記憶する。勿論、私などは句意の深さなどさっぱり判らず、何となくやんちゃ坊主が巨大な力の前で駄々をこねているような痛快さを感じたのであった。「若葉」の古稀春風特集号(昭32・10)の中で「むかしの人はこんな句は作らなかつた。心の中で思っているにもかかわらず老も死も恐ろしくないうようなさとりすました態度をしていた。老の誰もが一応感じる淋しさ、死の怖れ、その狼狽がここにある。それをそのまま出したことも現代の姿であり、尊い。(後略)」(山口青邨)の評があったのが印象深い。

このあたりから「自然へ単刀直入する力が鈍って来て」「風景詠よりも内なる自分を見詰めることに気が向いて来た」(共に自註)と作風に変化が見られる。この方向はやがて「いかに美しく老いるか」という晩年期最初のテーマに通

じて来るのである。風生俳句の幕あけである。このころの風生の姿には老いどころか、新しい仕事に取り組もうとする気力の充実が見られ、若々しく柔軟でさえあった。そして渾身に、自在に、生きて、詠った。

『愛日抄』を経て、やがて、七十七歳から八十六歳に至る句業、『喜壽以後』『傘壽以後』『米壽前』の晩年三部作は芸術院賞、つづく芸術院入りの因となったとも考えられるもので、評価の高い三部作として知られている。これにつづく『年の花』はその延長線上にあるが、この頃の作品は「老年こそ人生の花」ともいふべき見事な華やきをみせた。「いかに美しく老い得るか」という具体的な解答がここに出された。

生くることやうやく楽し老の春
月日過ぎたど何となく彼岸過ぎ
一生の疲れのどつと藤椅子に
拾着てすがすがしきよ命惜し
山を見る一つ加へし齢もて
木の暗をわがひとりゆく齡濡れ
雲の峰眉間に湧くは瀾むべし
冬草や黙々たりし父の愛
老の胸驚き易く一葉落つ
家康公逃げ廻りたる冬田打つ
夏寒く日教組といふ日本語
ここに見る老齡の美しさと優しさ、自在さと力強さは読む誰もの胸に、本音で話しあえる人間風生の温かみが沁みたと

と当時書いている。あるいはここからが本当の晩年であったかもしれないと思う。

『齡愛し』はこの最晩年の句境の集成であり、生前最後の句集となった。

しみじみと年の港といひなせる
露しぐれ四恩もつとも人の恩

妻に与ふ
命二つ互に待み冬籠

「年の港」という語への感慨、思いがけぬ長寿を授けてくれた、俳句への感謝、師友の恩、とくに生涯の良き伴侶であった敏子夫人への感謝と労わり、昭和五十二年夏に体調を崩してより、日をもって余命を数える思いはにわかに深まったと思われる。

おのづから序ありて枯れてすべて枯る

一切を放下して自然帰一への支度を整えているような作である。が、こうした中にもなお、余命を生き甲斐をもって生きていることを探りつけておられたという。死生一如、句人一如の気魄である。

見つめをる月より何かこぼれけり
凍蝶の縋りし石の動ぎしは
何かしら遠し遠しと年暮るる
朴落葉枝と訣るる声耳に

である。とくに高齡の人たちは風生の一挙手一投足を自らに重ね合わせて勇氣と励ましを得たのである。

「若葉」の大会で、六十代、七十代の会員たちが師・風生の前では小学生のように嬉々としていたのがいまも鮮やかに思い出される。自然と自己との見事な調和の中に風生俳句は晩年の「希望」の姿をもって、心境俳句の一点を極めたのである。

藻の花やわが生き方をわが生きて

昭和四十六年作、『年の花』所収。

「勝負せずして七十九年老の春」と並んで風生評によく引用される句だが、この句について次の自註がある。「偶成」と前書して発表している様式も徹底的に内容的にもマンネリズムが強く匂う、この時分まだこういう迂廻をしていたという記念品。」とこつぽどく否定している。この自註は昭和五十二年に書かれている。この時期の句境は、すでに完璧と思える前掲句からすらも、余分な構えを感じとっているのである。「作ったときは嘘ではなかった、が、いま見ると……」という自省である。

余分な気負いや芸をはなれて、もつともつと素直に、真直に己れを見つめ、生命を見つめよう。その真実にふれた自らの自己が作品に投影されるようでありたい。この頃から自然随順の句境は更に深く、澄明なものになっていった。「一木一草主義などということも借り物みたいな気がしてきた」

よべばこたへありて彼岸へ渡し舟
妻よ生きよみんな生きよと笑ひぞめ
没後の句集『走馬燈』は読みすすむうちに淋しさとも、悲しさともちがう、ただ水のごとく心をひたしてくる大きな感動の波を覚えるのである。強いていえば人間の生命の音が聞こえてくるのである。

九十五歳とは後生極楽春の風

亡くなられる十日前、句帖に書かれた最後の作である。自らを「俳句の虫」と称し、「老俳僕の俳句を作らなくなった時は僕が死んだ時。」と語っておられた通りの姿で逝かれたのである。

「幸せだった。みんなありがとう。」と人生の花道の引き際で振り返って笑顔を見せた、そんな感じのする作である。この世への見事な挨拶である。その死に、生の断絶の痛ましさはない、美しい生命の完結であった。

老い、生死、という重く苦しい大テーマに真向かい、人間の強さも弱さも赤裸々に見せながら生命の尊厳とかなしみ、自然の愛と力との融合の中に老艶の新境地をひらき、多くの人に希望と勇氣を与えつつ、ついには「いかに美しく死に得るか」を身をもって具現した。このことは俳句の真の目的とは何かという大きなテーマの再認識を私たちに問いかけているのである。平凡人をもって徹した先生の晩年の足跡の偉大さを、いまあらためて思うのである。